

旅のチカラ

市川 聡

2011年3月末に、2年ぶりにブルネイ王国を訪れました。おりしも東日本大震災の直後で、誰もが愕然とし、呆然とし、心に鉛を沈めたような状態での旅立ちでした。ブルネイ国際空港では、友人のガイド、ジャングル・ダイブが変わらぬ笑顔で迎えてくれました。大震災のニュースは、もちろんブルネイ王国にも届いており、無事を気遣ってくれるダイブと思わず抱き合って再会を喜びました。

ブルネイ王国では、空港やショッピングモールに募金箱が置かれ、日本の地震と津波のために、義援金が集められていました。それだけではありません。ダイブによると、国王の呼びかけで、米が主食のブルネイ王国ですが、一日一食、米を食べるのを控えて日本へ米を送ろうという運動が行われているそうです。

ブルネイ王国は、ボルネオ島のマレーシア領に囲まれた三重県くらいの国土に約35万人ほどの人が住む小さな小さな国です。おそらく多くの日本人が、その名も知らず、どこにあるかもわからない国なのではないでしょうか？ブルネイ王国は、石油が由ることにより世界で最も裕福な国の一つにも数えられています。日本に米を送るのであれば、何も国民が主食を我慢しなくても、タイ米を買ってどんどん日本に送ることも可能でしょう。しかしそうしないのは、みんなが少しずつ米を出し合うことで、被災者の痛みを分かち合い、被災者の心に寄り添おうという心遣いなのではないでしょうか？ブルネイ王国は、敬虔なイスラム教国です。アジアのイスラム教国の人々のこの心遣いが、心にしみるとともに、私たちは決して1人ではないということを改めて気づかされました。

久しぶりのブルネイは、今回もまた鮮烈でした。熱帯の風、に

おい、薄ピンクから空が燃え上がり紫となり、そして漆黒の闇へと鮮やかに移り変わる熱帯の夕暮れ、静かに響くセミの声、無数のオオコウモリが頭上をゆっくりと飛び去り、ホテルのイルミネーションが瞬く。クロコダイルのルビーの眼が小さな水音とともに水中に消える。一つ一つが色鮮やかに心に焼き付いていき、様々な心の澱がゆっくりと溶けていきます。

屋久島で旅する人を迎える仕事をしていますが、ともするとこうしたお客様のプリミティブな心の動きが見えなくなり、ガイドの力は、マニアックに自然を見せることができる技術と勘違いしてしまう場合があります。しかしこうして自ら旅をすることで、屋久島に来る方々の心の機微に改めて思い至ることができました。私たちができることは、極めて単純に自然の楽しさを伝えることです。愚直に、純粹にお客様とともに自然を楽しむことが、私たちの仕事です。そんな中でお客様よりもちょっぴりたくさん自然の楽しさを見つけることができるのが、私たちの誇りです。

絶望的な状況の中で、全く先の見えない暗闇にいるような気がするときさえ、朝起きて、今日は良い天気だなと思える瞬間があり、一杯のお茶がうまいと感じられる瞬間が必ずあるはずで、そうした小さな奇跡を見つけ、積み重ねていくことができれば、人生、捨てたものではないと思えるでしょう。そう、人間泣いているときよりも笑っているときの方が圧倒的に多いのですから！

写真はモッチョム岳の山頂で、空が笑っているところです。また落ち着いたらこんな小さな奇跡を見つけに屋久島に来て下さい。そんな皆様を心からおもてなしすることが、今私たちにできることです。

東日本大震災 復興支援ボランティア報告

松本 毅

2011年3月11日、ヤクスギランドを回って、森泉に戻ってきたらラジオで東北地方に地震があったとのニュースが流れていた。ああ、また地震があったのかぐらいにしか思っていなかったが、帰宅後、夕食の支度をしながらつけたテレビには信じられない光景が映っていた。津波に押し流されていく住宅、一面を焼きつくす炎、破壊された原発。

私の妻の実家は、宮城県登米市である。すぐに実家に安否を確認するがすぐには現地と連絡がつかない。ようやく海外にいる義弟経由で親戚一同の安全が確認できた。とりあえずは一安心。しかし、どうも落ち着かない。テレビから絶え間なく現地の様子が報道され、同じ映像を何度も見てしまう。

私の実家は神戸で、1995年の阪神大震災の時、2日目に両親・兄の家族を救出するため、現地に入った。その時に、胸に「ボランティアに来ました。」というプラカードを下げたたくさんの人々が続々と現地に入ってくるのを見て、胸が熱くなったことを鮮明に覚えている。その記憶が今すぐにも現地にボランティアに行きたいという衝動を駆りたてていた。しかし、現地の状況、現地へのアクセス、ボランティア受け入れ状況などがつかめない時点では動くことができなかった。

そんな中、3月24日から日本エコツーリズム協会(JES)の理事が岩手県二戸市に現地入りし、周辺地域を視察に入っていた。

JESは今年10月に二戸市でJESの全国大会を開催する予定で、まさに3月11日の午前中に全国大会の打ち合わせをするなど、二戸市と連絡を取り合っていた。そのような関係があったため、3月28日JES理事会で二戸市を拠点に支援を行うことを決定し、4月8日にJES復興支援会議が開催されることになった。JESの理事である私は、居てもたってもいられず、とりあえずどのような状況か、どのような行動がとれるのかを知るためにJES復興支援会議に参加した。



二戸市は、幸い地震による被害は少なく、すでに平常に戻っており、二戸市から沿岸部の被災地への支援にあっていた。そのため、市役所の職員は休みなしで支援活動にあたり、人手が足りないという。そこで私は、屋久島観光協会ガイド部会からガイドに呼びかけ、屋久島からボランティア隊を組織したいと提案した。また、同日開催された屋久島観光協会理事会でJESの支援活動に協力することを承認していただいた。そこで関係機関に「とにかく現地に行こう」と呼びかけたところ、4名のガイドが志願してくれ、4月18日から23日までの6日間の日程で岩手県北部久慈市野田村に現地ボランティアに入ることになった。

JES理事である軽井沢「ピッキオ」の楠部さんの導きで、まず二戸市市役所の復興支援室に向かった。小保内(こぼない)市長に出迎えていただき、「東北太平洋沿岸では地震が多く、沿岸部と内陸部でお互いに支援する体制がとられていた。これまで、海からの恩恵を受けていた内陸部が沿岸部を支援するとき、野田村は高齢者の自殺が多い村、メンタル面が心配です。女性のボランティアの方は、ぜひお年寄りに声をかけてあげて欲しい。野田村は、人口4600人。死者37名で行方不明者はすべて確認がとれている。少し落ち着きを取り戻しているので今ボランティアの手が必要なおき。」と話してくれた。



復興支援室の皆さんに出陣式をしていただき、地域振興課小野寺課長とともに野田村に向かった。久慈市に入っても特に地震の爪痕らしきものは見られなかったが、野田村の近くまで来たとき、巨大な瓦礫の山が現れた。それは町を丸ごと粉砕機で磨り潰したような瓦礫の山だった。車内に緊張感が漂った。さらに車が沿岸部に入ったとき、景色が一変した。県道29号線から海岸線までの1kmほどの間には全く建物のない瓦礫の平原が広がっていた。津波が襲ったところと津波が来なかったところでは全く被害状況が違っていた。津波が襲った村役場までの道路はすっかり瓦礫が取り除かれ、道路はきれいにかたづけられていた。我々は、役場横に仮設された野田村社会福祉協議会災害ボランティアセンターへ向かった。



ボランティアセンターには黄色いジャケットを着たスタッフ5~6人がいてボランティアの受け付け業務にあっていた。毎日平均20人ぐらいのボランティアが入っていた。中には外国人もいる。多いときはバスで30~40人が入ってくることもあるそうだ。我々が入っている間では、鹿児島県出水市の社会福祉協議会の方や二戸市、一戸市、弘前市、青森市などからボランティアが派遣されてきていた。

青森県平川市社会福祉協議会から派遣された工藤さんから中伊商店の泥かきに入るよう指示を受けて、さっそく土嚢袋とスコップを持って中伊商店に向かった。中伊商店は、鉄筋コンクリートの3階建の立派な呉服店だった。愛宕神社という立派な鳥居のある神社のわきに店舗を構えた由緒ある呉服屋さんである。周辺の家屋の泥かきはすでに終わっていたが、中伊商店は新学期の制服の仕入れを一手に引き受けていたため、そちらを優先していたので自分の家のボランティアの受け入れが遅れていた。じい様、ばあ様、息子さんと住んでいた。久慈市の市内にも店舗があり、そちらは無事で営業をしているため、息子さんは久慈市と行き来しているので不在がちだった。代わりに東京からボランティアに来ていた若者Aさん(お名前を聞くのを忘れた)が現場の指示をしていた。Aさんは、震災後いてもたってもいられず、昔世話になった方の実家の中伊商店だったということで、血縁でもないのにとりあえず知っている中伊商店に泊まり込みでボランティアに入ったそうである。



我々は4日間、中伊商店の泥かきを行った。毎日、屋久島勢5名を含め10名ほどのボランティアが作業にあたった。作業は、男性は住宅部分の床下、店舗にたまった泥かき、女性は、家具や店舗の陳列棚などの洗浄にあたった。住宅部分は、床下に5~10cm程度の泥が至る所に入り込んでいて、それをスコップで丁寧につまみ取って土嚢袋に入れて運び出す。この泥はいったいどこから来たのだろうか?非常にきめの細かい黒っぽい泥で、おそらく海岸の浅い海底の泥が巻き上がってきたものではないだろうか?この泥は、水を含んでいるのでセメントのように重い。腰を気遣いながら少しずつ土嚢袋に詰めていく。幸い気温が低いので匂いはあまりしないが、我々が入る前の週は、気温が高く、乾燥して、匂いと埃で大変だったそうである。この作業は重機が使えないので、こつこつと手作業でやるしかない。それでも根気よくやれば少しずつはかどっていく。毎日やっていると要領がよくなり、3日目には、住宅部分はすっかり終わった。少しずつきれいになっていく我が家を見て、最初は元気がなかったばあ様が少しずつ笑顔を見せるようになった。住宅部分がほぼ終わったころ、是非バリアフリーの住宅に改装したいので部屋の仕切りの壁をすべて取り払ってほしいと言ってきた。全く希望を見いだせず途方に暮れていた状況から少しずつこれからの生活に希望が見えてきたのだろう。我々も壁を壊す作業に気が入った。すべて壁が取り払われた室内は何か明るく感じられた。





壁を取り払った住居部分

店舗部分の大量の商品は、完全に泥水に浸かっていたのでとても販売できそうもなかったが、じい様はすべて洗って売れるからと泥まみれの商品をすべて2階に回収した。捨てられない気持ちもよくわかる。水に浸かった筆筒は、引き出しが膨らんで開かなくなっている。それをバールでこじ開けると中からお孫さんの写真が出てきた。これも家族にとって大切な思い出であるので、一つ一つ丁寧に仕分けをする必要があった。陳列棚もなかなか捨てられなかったようであるが、徐々に片付いてくると少し吹っ切れてきたのか、処分するかしないかの判断が早くなってきた。一体いつ片付くのだろうかと思われたフロアもみるみる片付き、ボランティアの方々の動きも軽やかになった。



このラインまで海水がきた

4日間で一階の住居部分、店舗部分はほぼ泥かき、洗浄を終了することができた。作業が終了し、みんなで記念写真を撮り終わると、ばあ様が大きな声で我々にお礼を言い始めた。そして、一人ずつ手を取って、涙ながらに「このご恩は一生忘れません。」と深々と頭を下げた。私も胸が熱くなり、「必ず立派に復興した中伊商店を見に来ますので、元気に頑張ってください。」と手を握り返した。この絆は、何かお手伝いをしたいという思いで突き動かされたボランティアでしか生まれたいのではないかと思った。「ボランティアが現地で逆に元気ももらった」ということをよく聞かすが、元気をもらうという関係ではなく、お互いが触れ合うことで生まれた絆が希望を生み出すのだと思った。Aさんは、「最初はボランテ



中伊商店の皆さんと記念撮影

ィアに指示を出すのが大変でありましてにしていなかったが、屋久島のガイドさんたちはその時々で的確に状況を判断して自主的に行動してくれたので本当に助かった、やっぱりガイドさんは自然の中で活動することでそういう能力が鍛えられているのですね。」とずいぶん喜んでくれた。我々が車で帰ろうとするとまた車まで駆け寄ってきて別れを惜しんでくれた。必ず、また来ますと約束をして別れた。

ボランティア期間中、もう一つ親しくなったのは、毎日お昼を食べに通った食堂「みなみ」だ。震災後、野田村で一番早く営業を再開した食堂で、我々が入る2日前に営業を開始していた。ボランティアセンターの工藤さんに勧められて行ってみると、震災価格で安くとてもおいしかった。ボランティアの方々が昼食を食べに来るのでとても忙しいにもかかわらず、みんなと楽しく話をする若奥さんがいて、我々もすぐに仲良くなった。「屋久島から来た緑のジャケットの人たちと有名ですよ。」と教えてくれたのも南さんだった。毎日、今日は何を食べようかと楽しみだった。「ボランティアの皆さんが食べに来てくれるので助かります。」といつもにこやかに話しかけてくれた。南さんは、自宅が久慈市にあるので震災直後からブログで野田村の様子を発信したり、安否情報をネットで流し続けていた。

<http://d.hatena.ne.jp/minami2007noda/>



食堂「みなみ」の南さんご夫婦と

最終日には、20歳も年が離れているというシェフの旦那さんも出てきてくれて、みんなで記念撮影をした。その写真はブログに初顔出しでアップされ、その後はボランティアの皆さんと写真を撮ってブログに載せるようになった。最後は、若奥さんが中伊商店までやってきて別れを惜しんでくれた。

二戸市地域振興課小野寺課長の計らいで、地方FM局の取材と二戸市市長、市役所職員、岩誦坊クラブの方々と交流会を催してくださった。

地方FM局カシオペアFMのパーソナリティー村上ちとせさんの取材を受けた。屋久島からボランティア隊が野田村に入った経過や野田村でのボランティア活動の様子、二戸市の皆さんとの交流会の様子などを録音した。5月中旬ごろの放送になるとのことだった。収録後、村上さんから震災当時の話を聞かせてくれた。「ここは市の施設が入っているので自家発電があり、地震直後から安否確認や生活情報を流した。直後は不安から情報を求める人々がきたが、その後は、停電、物資の不足から怒りをぶつけてくる人が増え、電気が通って沿岸部の被害状況を知ると今度は何かできることはないかと申し出てくる人が増えてと、刻々と変化する人々の気持ちに常にどんな情報を流せばいいのかスタッフとミーティングをしながら、24時間体制で放送を続けた。」と話してくれた。いろいろな場所でそれぞれの立場で皆さんが頑張っていたことを知った。収録よりも、収録後の話のほうが盛り上がり長くなってしまった。

交流会は、市長をはじめ、支援活動で大変お疲れのところをたくさんの方が集まってくださった。郷土料理と、どぶろく特区になっているということでそれぞれご自慢のどぶろくを持ってこられ、振る舞っていただいた。我々が土産に屋久島から持っていった「三岳」をお湯で割ることもなく、生でがぶがぶと飲んでおられた。そのうち、車座になり、市長さんから「二戸市はJESのエコツーリズム大会を10月に開催する予定だった。沿岸部の視察に行ったときに現地の方からは是非秋のエコツーリズム大会を開催して復興の原動力にしてほしいといわれ、迷っていた開催を是非とも実現したいと今頑張ってい



二戸市の皆さんと交流会

る。」と熱い思いを語ってくださった。我々も何らかの形で「JESエコツーリズム大会 in 二戸市」をお手伝いしたいと思った。

ボランティア活動は4日間という短い期間ではあったけれども、とても中身の濃い4日間であった。現地ではまだまだ長い復興への活動が強いられているが、今回できたつながりを大事にして、顔の見える末永い支援活動を続けていきたいと思う。

私にとって、神戸と仙台という我が家の両実家が未曾有の震災に見舞われるという経験は何か特別なものを感じてしまう。神戸の震災の時、変わり果てた故郷を見て、神戸はもう復興は出来なのではないかと思った。しかし、神戸の実家のマンションから見える景色は変わってしまったが、やっぱり神戸は私の故郷であり、焼け野原となった町並みは立派な高層マンションとなって復活した。

今回の震災で壊滅的打撃を受けた地域もきっと神戸のように復興できるはずという確信が私にはある。復興とは、ただ元に戻すということではなくて、犠牲になった方々に胸を張って、こんな住みよい街になりましたよ、こんな安全な村になりましたよと言えるように再建することだと思う。そのために、机の上で図面を引くのではなくて、地元の人たちをはじめ、たくさんの方が集まって知恵を絞り、協力しあって本当の意味での復興を実現してほしいと願っている。

最後に、私を野田村に導いてくれたJES、二戸市役所、野田村の皆さん、また、惜しみなく多額のカンパをしてくださった皆さん、そして、私の活動を陰ながら支えてくれているYNACのスタッフ、すべての方々に心から感謝いたします。

【寄付・振込先口座】

三井住友銀行 目黒支店 普通 7021778

特定非営利活動法人日本エコツーリズム協会

(トクティヒエイリカツドウホウジン ニホンエコツーリズムキョウカイ)

※一口1,000円から受け付けています。

※用途につきましては、JESホームページ上で逐次報告してまいります。



カシオペアFMの村上さん

比留間 雄太

東京に住んでいた時、社会人サークルでゴスペルを2年ほど歌っていた時期がある。

昔、中学・高校の学生時代のイベント「合唱コンクール」では燃えるほうで、一人一人の声が合わさって「大きな一つの声」になるその瞬間がいつも僕の感覚を刺激していて好きだった。本番当日までの間、皆と声を合わせる難しさや「お！声が重なった！」と感じた時の、心の底から興奮する感じ。どれも一人だけでは味わえない瞬間だ。

『ゴスペル』は歌を自由にアレンジできる音楽だ。アカペラで歌ったり、手拍子を付けるのもその一つだが、ドラム・ベース・ギター等のバックバンドを付けたりすることもある。基本的に楽器は『ヒトの声』。この他にどんな楽器を付けるか、または付けないか。それには決まりはない。ある程度の人数で歌うので、上手・下手もあまり問題にはならない。悲しい時、嬉しい時、どんな時にも「その時のゴスペル」が必ずある。そんな感じだろうか。

さて、今回は3月11日に発生した東日本大震災で心痛めた全ての方にエールを送っている団体を紹介しようと思う。『ゴスペル』という歌の形で。関東を中心に13ヶ所の拠点をもち、心の底からゴスペルを歌う団体「NGOゴスペル広場」。メンバーは総勢1000人を超える程の大きな団体だ。僕が東京の立川の小さなサークルでゴスペルを歌っていた時に、グループの指揮をとっていたのが、今のNGOゴスペル広場のリーダー、Nana Gentleさんだった。その方から先日メールがあった。以下、引用させて頂く。

『今回大震災があって、ゴスペルをやっている者として何ができるかと考えました。ゴスペルから私が学んだことは、「歌(歌うこと)には力がある」ということ。明るい言葉を歌うことで、前向きになったり癒されたりする。そういう、「自分で歌える歌」を贈ることができないかなと思って、この一曲『“Anthem For Unity” We walk together』を書きました。「We walk together」(私たちは共に歩んでいる)ゴスペルの元であるキリスト教の世界では、お互いをブラザー／シスターと呼び合うように、“人間は皆、神様を父親とした兄弟姉妹”という考えがあります。実際私たちは、お互いに知り合い同士でなくても、何かしら関わりあって生きています。励ましあうのに、親しい間柄である必要はない。実際ゴスペルを歌っていても、大勢で歌っているハーモニーの中に身を置くことで、何か元氣付けられたりする。別にお互い知り合いではないのに、でも、お互いの力になることはできるんです。だから、この「We walk together」という言葉の通り、この歌に出会う全ての人が、歌で心をつなぎあい、前向きに生きていくための励ましを送りあえる仲間になれたらと思っています。』

このNana Gentleさんの声かけで、歌の力を信じる“プロではない”様々な人が、様々なアレンジでこの一曲を歌いインターネット上のYouTube

に投稿している。純粋な歌声の一つ一つが大きな力を生んでいる。有名な歌手が社会に与える影響力は大きい、一般市民が与える力も無限にあるに違いない。この動きは、今では国境を越え海外にまで広がり、日本各地のみならず外国からの映像も集まっている。是非一度、皆さんもお聞きになって頂きたい。

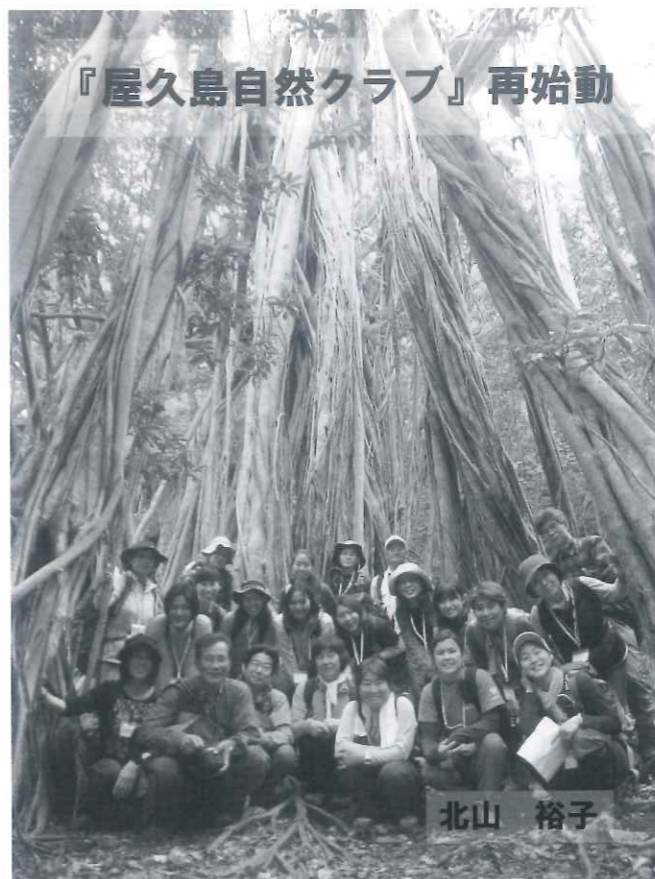
『Sing for Japan! Anthem For Unity』

<http://www.gospelhiroba.com/anthemforunity/>



屋久島の宮之浦集落には、「屋久島総合自然公園」という個人的にお気に入り場所がある。観光客は殆ど行かない場所だが、4月には道路脇の街路樹の桜がとても綺麗で、5月下旬の夜には緩やかに流れる小川でゲンジボタルが飛び交う。秋の満月の夜には公園内の野外ステージで有名アーティストが集まって「やくしま森祭り」のライブも毎年開催される。今回、この公園の森の中、僕も「Anthem For Unity」を歌った。人の気配の全くない静寂な森の中に足を踏み入れた時、最初、僕に対する“警戒の声”が響いていた。しかし、少しするとヤマガラやメジロの囀り、アオゲラのドラミングが近くで聞こえるようになり、なんとも自己満足だが一緒に歌っているような気持ちになった。そんな中、よく山頂でヤッホーと『山びこ』で遊んだりするが、森の中でも少し柔らかい『山びこ』が返ってくるのに気がついた。樹木や樹冠の間を上手に抜けていく声もあれば、適度に樹木にあたり、跳ね返って来る声もある。近くの木に当たれば速く大きく、遠くの木に当たれば遅く小さく、時間の幅と強弱を持って、発した声が返って来る。そんな、普段味わえない伸びのある森の音響を感じながら歌う事はとても新鮮で、大人数で歌えたらどんなに心揺さぶられるステージになるだろうと思う。安房川の河口にも、堆積岩がオーバーハングした良い自然音響スポットがある。たまにお客さんとこの場所で歌ったりするのだが、今回はここで「Anthem For Unity」を歌ってみようと思っている。どんな響きになるか楽しみだ。

『屋久島自然クラブ』再始動



屋久島に移住して丸3年目を迎えた今年、少しゆとりを持ちたくて約2年間お世話になったYNACをお休みさせていただくことになりました。その話をした矢先、小原さんから言われた一言「それじゃあひろちゃん、『自然クラブ』の仕切りやらない!？」条件反射のように「ハイ!やります!!」とってしまった私。かくして『屋久島自然クラブ』は今年再始動することになり、私の島でのスローライフはまたしても遠のいたのです。

『屋久島自然クラブ』は1999年に発足したYNACの島民向け地元還元型企画です。スタッフと会員と一緒に、山・海・川・溪谷と島のあらゆるフィールドで遊ぶこのクラブの存在を知ったのは、事務所で過去資料を見てからでした。2000~2005年までの活動記録には、普段はなかなか行けない場所、ツアーではやらないようなこと、また会員間の楽しそうな交流が綴られており魅力満載。いつも「今あったらよかったのに・・・」という思いで記録を眺めていました。

正直自分に担当が振られるなんて思ってもみないことで、果たして私に務まるのだろうか・・・という不安の中、「自分が担当すればその楽しそうな活動ができる!」ということも引き受けた大きな一因ではありますが、この話が出る数ヶ月前に、奇遇にも旧会員の方と親しくなっていたことも私を力強く後押ししてくれました。偶然知り合ったその方は、熱心な旧会員の方で、私に自然クラブの活動がいかに面白かった

かを聞かせてくださいました。その方も再開を待ち望む一人だったのです。また、同じ頃に私の周りで『自然クラブ』がまたあればいいのにな!という声がいくつも聞かれたので、みなさんの思いがこの再開につながった気がしてなりません。不思議な縁を感じます。

4月17日(日)に第1回目のアクティビティ『西部照葉樹林フォレストウォーク』が行われました。初回から20名ものご参加をいただき、みなさんと和気藹々、楽しく森歩きをしました。自然を楽しむ知るだけではなく、ここで生まれた出会いが、また何かの原動力になるかもしれません。

私の好きな相田みつをさんの言葉があります。

出逢い そして感動

人間を動かし 人間を変えてゆくものは
むずかしい理論や 理屈じゃないんだなあ

感動が人間を動かし 出逢いが人間を 変えてゆくんだなあ……

「日めくりひとりしずか」より

その時の出逢いが 人生を根底から

変えることがある よき出逢いを

「にんげんだもの」(文化出版局刊)より

そして別の会員の方から再開にあたって実際に寄せられた言葉。

「ここから広がる人の輪が

また、新たなつながりになることを楽しみにしています。

私は人生変わりましたから(笑)」

今回、震災があり一番に何を心配したかというやはり「親戚・友人・知人は無事かどうか!？」ということでした。そして家族を、友を、同じ日本人を、同じ人間を想う気持ちが大きな力を生み出していく様を見てきました。人と人とのつながりの大切さ、ありがたさ、尊さをこの震災で改めて知らされたように思います。

こんな時ですが、こんな時だからこそ、『屋久島自然クラブ』に知る喜び、出会う喜びが溢れることを祈ります。

★ 島内限定企画ではありますが ★

★ ぜひ情報チェックしてみてください ★

屋久島自然クラブ

blog : <http://yakushima89nc.blog69.fc2.com/>

Twitter : http://twitter.com/yakushima_nc

YNACの2010年

この一枚



人生で初めて撮った天の川 永田岳山頂にて (榎村)



昼休み (池田)



2010年4月7日ザトウクジラの親子が西部の海にやってきました。(市川)



ダイビング講習の最後に一湊タンク下でファンダイビング。いきなりアオウミガメの子どもに遭遇。(松本)



2mの近さまで寄らせてくれた。好奇心旺盛なコザルをお兄ちゃんが心配そう見つめている。(比留間)

もしドラ！もしツアーガイドがドラッカーの マネジメントを読んだら

榎村精一

ドラッカーの本がブームらしい。私もNHKアニメで初めて知った。原作は野球部の御伽噺であるが、ありがちな部内の人間関係を、ドラマらしく仕上げている。3話まで見て興味が沸き、教科書として「マネジメント」を読んでみると、企業訓の宝庫である。寝る前に読む本にしては勿体無い。文献を基に色々書くと、私個人が現実として見ていることがやはり表に出る点はご了承いただきたい。

・今日の財やサービスで、まだ満たされぬ顧客の欲求は何か？

企業の役割は外にある。自らの事業とは何で、顧客は誰か？ こういう問いに対する答えの賞味期限はせいぜい10年が限度で、その理由は世間の人間が入れ替わるからである。さらにその間、サービスに対するイメージはどんどん固定される。

ウェーバーの法則といって、刺激を知覚する能力は、刺激量の対数に比例する。人間というものは便利さに慣れやすいもので、100倍便利にして、やっと2倍ありがたいと思うものらしい。

10年で顧客の世代が新しくなり、再訪問者も増えるのだから、そうなった場合に100倍のサービスをするより、新しいサービスを考えるほうが、やっけて楽しいだろう。もののけ姫から10年、縄文杉の発表からは40年になる。「離島」という言葉のイメージと、地理的な不便さに救われている点は非常に多い。だいたい屋久島まで来るのが大変である。来ただけでも立派なもので、なかなかイメージを消費する機会がない。こちらはのんびりやればよい。気づいたところにブームも去るだろう。

・大工と話す時は、大工の言葉を使え

「無人の森の中で、木が倒れた時、音はするか？」 答えは、「誰も聞かなければ、音はない。」

接客業であるから、コミュニケーションが日常業務になる。

コミュニケーションとは何か。自分の意思を話したり書いたり、表現して、意見や感情や情報を伝える、あるいは、相手の発するそれらを受け取り、その場の経験・経緯を共有することである。大げさに言えば互いの人生を飲み込むことである。

受け手の言葉を使うと、コミュニケーションが成立する。小学生相手にどんな話し方をするか考えてみればよい。相手の経験や立場に基づいた言葉を使う。瞬時に相手を洞察するには、こちらに相手と同じ経験がなければ難しい。経験がなければ、読書や映画などの疑似体験を積むぐらいしか方法はない。

コミュニケーションは期待である。相手の期待通りに見せ、話し、動く。そうすれば受け入れられやすい。相手の情報を得たい時は、何が欲しいか正確に伝えなければ、欲しい物が手に入らない。

よい意味で期待を裏切り、相手の関心を更に引き出してもよい。しかし、予告のない裏切りは、受け入れられないことがある。

・組織構造において、おのずと進化するのは混乱と摩擦のみ

「マネジメント」では、マネジメントとは何かを明確にしていない。社会の穴を埋め、個人のニーズを満たす。その手段を持つ組織を「会社」や「企業」と呼び、それらが機能不全に陥らないための機関を「マネジメント」と呼ぶ、と書いてある。そして、その機関が果たすべき役割と責任とについて述べてある。マネジメントを行う者をマネジャーと呼び、唯一必須の素養は「真摯さ」であるという。真摯さは、後から身に付くものではない。

マネジメントとは、生物でいえば脳みだいなものである。脳と各臓器の間にはホルモンなどによる相互の刺激があり、脳が障害を負えば臓器が不全に陥る。企業内に混乱と摩擦が起きれば、それは認知症だと思えばよい。マネジメントの最大の成果は組織の秩序と目標の管理である。人材育成はその手段であって目的とはならないのである。ではマネジャーとは何か。「こころ」である。少なくとも、コミュニケーションにおいては、「脳におけるはたらき」という意味で、マネジャーのはたらき=こころ といえる。

・成果の前提は組織構造

西洋では「二人のよい主人より、一人の悪い主人の方がまし」。日本語では「船頭多くして」という。

我々は顧客とコミュニケーションをとり、マネジャーとして様々な意思決定を行う。ツアーパーティは組織であり、その組織行動について議論は不要である。最終決定は一人が下せばよい。

組織構造はその存在目的に従う。目的達成のため、適材適所はそのつど設定されなければならない。我々が山に登る場合は、毎回、人数や構成員が違う。しかも自分で設定したものではない。こころをどこに尽くすか、毎回悩む。組織全員のニーズを満たす行動は、なかなか取れるものではない。その満足について約束はできない。われわれは真摯に、最善を尽くすのみである。

・成長そのものを目的にしてはならない

適切な規模で仕事を長く続けるための、さまざまな方法が、「マネジメント」という言葉でまとめられている。20歳をすぎても、さらにまだ体が大きくなることはない。よりよい状態になろうとし、その状態の維持につとめる事が正しい。

マネジメントの役割は管理である。成果のうち、増大するものと縮小するものを見極め、既存のモノやサービスをどんどん陳腐化させ、捨てなければ、力を集中させるべき事象や、新しいニーズは見えない。そして変化の能力を失い、仕事に飽きて終わる。

社会に対し、我々の役割と事業を示し続けなければ、我々は社会から廃棄され、別のニーズに取って代わられる。人間個人のあり方も、組織のあり方も、この点では変わりはない。

相手に聞いてもらえる音を作り出せないと、生き甲斐を持つ事はできないのである。

剽窃 情熱と観察眼

榎村精一

もともと、私は自然が好きだったわけではない。間違っただけに興味を持った。高校で生物を選択したのは、単に物理が苦手だったからである。

学生時代に生態学や植物学など、自然の初歩を学んだが、自然というものは、それで簡単に理解できるような代物ではない。卒業してから、修士で再度学んだのは、そうすれば、もう少しは解るようになるかと思ったからである。

やってみると際限が無いので、修士で卒業して、一度就職した。これはよい経験だったが、どうも、遊びや人付き合いが苦手で、職場に愛着も持てず、長居はできなかった。6年も大学に通ったのに、もったいない事をしたなと思ったので、人に紹介されて屋久島で職を得た。以来、屋久島に7年いる。いまだに大学生のような気分である。自然の事が解ったか、といえばそうでもない。いまだによくわからない。

しかし、たまには、納得のいく場合や面白いこともある。いろいろ考えてキャンプ料理を作ったり、写真をきれいに撮ってサービス業らしく振舞うのも、自分で責任を持つ仕事として大変面白い。しかし、面白いといっても、それは私の問題であって、ただの「快樂の消費」である。何か身につく物もあろうが、それでこの先どうなるものでもない。

ときどき、自然とは何かを考える。冷静・客観的に考えるためにも、「思考の対象物としての自然」を、むやみに尊敬しては、いけない。

学生時代に、先輩に説明を求められる。「そんな事をして何になるか、何がやりたいのか説明せよ」と聞かれ、返事に困る。こういう質問は先手必勝で、答えを知る必要はない。だいたい、答えられるわけがない。

島に移り住んですぐ、似たようなことを聞かれた。

この手のやり口は、新人には一番効果がある。若いのが、真面目に一生懸命に仕事をしているうちは、こういうことを考える余裕がない。そこを古参に突っつかれて、へこたれているようでは先行きもたない。頑張る必要がある。そのうち年を経ると、自分のやっていることこそ真の学問だ、などと思いつくようになる。そこまで辛抱すれば、次世代の若い人から畏れられるか敬遠されるか、たまには尊敬してもらえるかもしれない。

自然とは何かを考えるのには、まだ別に理由がある。

一応、自然の真ん中でガイド業などを生業とする者としては、自然とは何かを考えておくと、それなりに格好がつく。答えは、相手に応じていろいろ変える。占い師のようなもので、自然とは素晴らしいものだと考える人には、そのように答える。こういうことには、経験と、人の顔色を伺う技術が

必要である。とりあえず、人といわず自然といわず、対象をよく見て、適切に対応しなければならない。別な表現をすれば、これを手練手管という。「お前も自分のやり方で全てを説明したがるが、実は自分の説明もよくわかってらんのではないか」そう言われればそうかもしれない。何せ確たる答えが無い。このような仕事で得る常識は、世間で通用するものなのだろうか。

ついでに、自然を考えるきっかけとして、屋久島だけではなく、他の場所に関する情報をいろいろ集めて整理してみる。こういう作業は情熱の産物である。いつまで続くものか、情熱に駆られてみなければわからない。膨大な量の事実を、飽きもせず集めるには、ただそれだけが必要である。

我々は色々なものを見る。目で見える場合もあるが、道具を使う時もある。カメラや顕微鏡や望遠鏡を使えば、見た物の要・不要を問わず記録したり、肉眼では見えない物を見たりできる。こういう道具は「見る技術の象徴」であり、所有者が「見るための道具を使う技術」を持たないと意味がない。

「道具を使う技術」はテクノロジーである。新しい道具を使いこなす、この経験と技術がテクノロジーの醍醐味である。子供がそれを一番よく知っている。テクノロジーがまだ進歩していなかった時代には想像力が優先した。これも、子供がその楽しみを一番よく知っている。黒板に一つ打たれた「・」を見て「テントウムシ！」などという大人はまずいない。

だから技術を使って、たとえば大腸菌などを気が済むまで見てみる。この場合は電子顕微鏡を使う。そんな小さなものを観察する尺度で人体を考えたら、すべてを理解するまでに気が遠くなるほど時間がかかる。そもそも人体の観察は複雑すぎて面倒だから、ヒトは大腸菌を見たのである。ハッブルで宇宙をながめると、何万年も過去の光が見えたりするが、我々は100年も生きてはゆけない。こういうテクノロジーも情熱の産物であろうか。とにかく普通では見えないものが見えればいいのである。見えた場合にどうするかは、見えてから考える。見えなかった場合は、見える機械を完成させるまで頑張る。情熱には体力が付随したほうがいいらしい。日本人にはもう難しいことだろうか。

道具を使う・使わない、といった話はさておき、ガイドにとっては目が命ともいえる。危険や面白さを、常に冷静に、先んじて観察分析し、客人をストレスや心配から遠ざけねばならない。その点には、普通人の思いもよらぬ、深く細かい工夫を凝らして、遂には、視力がそのまま理論・創造・思想の源になる、という自覚に到達しなければならない。

剽窃とは他人の文章で角力を取ることである。自分で考えていては、なかなかこれだけ多彩な事は言えるものではない。

屋久島修行開始！



池田 裕二

初めまして、池田裕二と申します。

4月よりYNAC研修生として、ガイド修行を開始いたしました。お客様に喜ばれるよう、屋久島ガイド術とおもてなしを勉強中です！好きな分野は生物全般です。特に珍獣・珍花、海の生物が好きで、イルカクジラ類、ランの花、爬虫類両生類、古代魚の仲間は魅力的です。

大学では農学を専攻し、3年前から「NPO 法人みらいじま」にて東京の御蔵島ツアーのボランティアスタッフとして参加しておりました。御蔵島の野生イルカと泳ぐ、魅惑のツアーです。イルカと泳ぐことは、単におもしろい、というだけでなく、全く何も考えずに夢中になれます。雑念がすべて消えて本能だけで体が動くのです。スポーツでは味わえない、特殊な感覚です。

イルカをはじめとする御蔵島の自然に触れ、貴重な自然を残したい、自然の楽しさを伝えたい、と思っている中、屋久島と出会いました。

屋久島に魅かれた最大の理由は、水です。

- ・沢の水が飲めること
- ・暖流の黒潮が、豊かな海の生物を育み、きれいなサンゴも見ることができます。
- ・ウミガメ産卵のための上陸数は日本屈指です。
- ・島の周りはイルカやクジラの通り道です。
- ・今日もどこかで雨が降り、虹が出るかも。
- ・山の上から見渡すとあちこちで「雲が生まれる様子」が見ることが出来ます。

- ・青空や、夜の満天の星空は格別です。
- ・豊かな雨量の恩恵で島の主な発電は水力発電です。
- ・良質の温泉がこんこんと湧いています。
- ・朝焼けと夕陽がとともきれいです。

そんなこの島を好きになり、屋久島の楽しさをより多くの人に伝え、後世に残したいと思いました。

今、夢をかなえるチャンスに挑戦します。

=====

友人によくこう質問をします。

「好きな生き物、10種類くらい言ってみて」

するとたいていは、犬、猫、イルカ、クジラ、ウサギ、ウミガメとか、そんな具合の回答が来ます。

イネ、ダイズ、ニンジン、キャベツ、屋久杉、ムクムクゴケ、とかいう人は、滅多にいないですね。

植物も生き物です、生き物に詳しくない人でも、屋久島を旅すると植物は生き物なのだ、と強く実感することでしょう。

そうすることによって、食べ物への敬意や、植物への感謝は自然と湧くのではないのでしょうか。

私は食いしん坊なので食べるのが大好きですが、「食べること以外にも、生き物を愛でよう」というスローガンを抱え、野外に出ます。太陽を浴びたキラキラもふもふのコケが待っています。水族館では決して見る事ができない、海の本物の魅力が待っています。

生物の、神秘的なところや、謎めいた生態の秘密を学んでいくと、名前も知らない道端の草花さえも語りかけてくるような気がします。

パッと目の前の世界が明るくなるような、そんな感覚になるでしょう。

生き物の世界って、面白いんです！

せっかくの屋久島旅行、時間をかけて日帰りであわたくし「杉だけ」見て帰るのはルーブル美術館へ行ってチョロツと「モナ・リザ」だけ見て帰るのと同じくらいモットイナイと思います。

屋久島の旅はゆっくり、じっくり、気持ちよく。

=====

3月にYNACのボルネオ島ブルネイ・ジャングルツアーに参加いたしました。そこで見たものは、地球の神秘そのもの。

清浄な空気に満ちたジャングルを歩き回り、地球の自然のフルパワーに触れた旅。

沈みゆくオレンジ色の夕陽は、タンニンで黒く色づく、ぬらりと色づいた河の水面を鮮やかに照らしながら刻々と色を変え、紺色から始まる闇へと静かに消えていく。

ボルネオ島は珍獣の宝庫であり、世界で最も貴重な原生林が残る地域の一部です。中でも、世界で最も珍しい動物のひとつ、幻のトカゲ、ミナシオオトカゲが生息します。

どれくらい珍しいかというと、オカビやコアラやジャイアントパンダも珍獣の代表ですが、彼らが「普通」に感じるほど、このトカゲは珍しいです。

通常トカゲには耳(外耳孔)がありますが、本種にはそれがありません。ヘビには耳が無く、トカゲからヘビへの進化を埋める種類なのか、謎が謎を呼びます。ミナシオオトカゲには鱗があり、鱗のないヘビよりも、やはりどう見てもトカゲ。生きて捕まえられる例は限りなく少なく、標本すら数体しかないようです。まともに写った写真すら、数枚しかないと言います。

今回の旅ではその幻のトカゲを見た！というガイド、ジャングル・ダイブの案内のもと、目撃例のある生息地に足を踏み入れ川にも潜りましたが、相手は何せ、珍トカゲ、一朝一夕で見つかるような相手ではありませんでした。しかし道中、貴重な動植物、キノコ類に会うことができ、わくわく感は膨らむ一方でした。

この土地で、見たい生物を見尽くす、というのは一生かかっ



ミナシオオトカゲが潜む川で調査

ても無理かもしれません。テングザルやサイチョウ7種、オオコウモリ、イリエワニ、リス・ムササビ、ウツボカズラ6種、ヤモリ数種、昆虫、クモ、ラン数種、巨大ピカクシダ、ざっと思い起こすだけでも貴重なものに出会えました。

しかしブルネイで見ることのできる珍しい生き物は多く、まだまだ神秘が隠されていそうです。

人も温かく、料理も素晴らしい。今までで旅で訪れた中では、一番の「平和を感じる」土地。平和、そんな言葉しか思いつかない国ブルネイ。通いたくなるステキな場所です。YNACツアーで今後また、企画があるかもしれません。その時は、一緒に地球の神秘を探求しましょう。

余談ですがブルネイの民間療法に食虫植物ウツボカズラ(ネペンテス)を利用する、というものがあります。

私もモノは試しに「目薬」になるという種類「アンブラリア」の虫を溶かす消化酵素液を点眼したら、日本製の抗菌目薬では治らなかったモノモライが一晩で治りました。ウツボカズラ・エキスの効能は…素晴らしい！

=====

長くなりましたが、屋久島は五感をフルに活用し、ささいなことにも悩まず自然を楽しむ場所です。

五感に加えて、もうひとつ、楽しむ方法を教えます。

それは「呼吸の気持ちよさ」

茨城に住んでいた時に、少しヨガを習いました。ヨガで大事なものはポーズではなく、呼吸のコントロールです。深い呼吸を、自然に行えば、良いと思います。

ツアーの休憩時間にも、深い呼吸をさらっと取り入れて、より気持ちの良い屋久島旅行を提供できれば、と考えています。

特に屋久島の、雨上がりの晴れた日、そよそよと流れる空気が気持ちよいです！

Breeze is Nice!

屋久島を快適に楽しむことができるツアーのデザインを目指します。

皆様、どうぞよろしくお願いいたします。



ネペンテスの消化酵素目薬でモノモライを撃退

屋久杉伐採の始まり

応仁の乱と法華宗の山の神制圧

小原 比呂志

私は屋久島の話をするとき、相手の人と屋久島との間にどんな関連性があるかまず考えて、そこを切り口にするようにしています。2年ほど前、下関の東亜大学に招かれて、屋久島について講演をしたとき、まず下関と屋久島との関連で、つかみとしてなにか面白い話題はないだろうか？といろいろ考えていて、思いついたのが「応仁の乱」のことでした。

応仁の乱と瀬戸内海の混乱

応仁の乱。1467年から1477年にかけて延々と続いた、室町幕府の内乱です。將軍家の跡目相続争いを発端に燃え上がり、国内の守護大名がそれぞれ細川氏と山名氏とを総大将として東西に分かれ、結局自分たちで疲弊してしまい、新興勢力の成長を許してしまった、あまり意味のよくわからない大戦争でした。

このとき西軍の主力として細川氏に立ち上がったのが、山口の守護大内政弘でした。大内氏は最盛期に中国地方の西半分と、九州北部を領有した大大名です。戦いはうやむやに終わりましたが、細川氏と大内氏の陰悪な関係は室町時代を通じて続きました。

この両氏は、いずれも明との勘合貿易の利権を握る貿易大名で、大内氏は博多商人、細川氏は堺商人と組んで、遣明船団を動かしていましたが、応仁の乱の後、細川氏には困った事態が起こりました。瀬戸内海の治安が悪化し、大内氏が制海権を握る、関門海峡を通れなくなったのです。

そこで細川氏は、九州南まわりルート（南海路）を使わざるを得なくなりました。しかしそこには当時南海の制海権を掌握しつつあった、島津氏がいました。

九州南部の制海権

国家間の正規交易であった勘合貿易が混乱してくると、貿易の量が減り、その結果国家の認めない非合法の民間交易＝後倭寇の活動が盛んになりました。明の資料によると、この倭寇の本拠地の筆頭に薩摩があり、また大隅、種子島も根拠地である、と記されています。

南九州に基盤を持つ島津氏は、15世紀の中頃、南西諸島をめぐって琉球王国とトカラ列島付近であらそい、次第に南九州の制海権を掌握してゆきました。当時、いくつかの分家に分かれ、それぞれ勢力を競っていましたが、応仁の乱では細川氏の東軍にくみしていました。細川氏は、島津家に警護を依頼し、南海路を確立してゆきます。

海賊は、海域を通行しようとする船は略奪します。しかし警護料を払えばその海域の通過の安全を保証するという、強制的セキュリティ契約のような仕事もしていました。南海路でも島津氏はまさに大海賊とっていい存在でした。

その島津氏に臣従しつつまい距離をとりながら、南海の中央に拠点を構える豪族がいました。種子島氏です。南九州の各港は、細川氏の南海路確立によって栄え始めましたが、その中の一つが種子島の赤尾木港、いまの西之表です。

その繁栄を見越すように、種子島に布教を開始した仏教教団がありました。法華宗（日蓮宗）です。法華宗は分派の激しく、数々の教団が派生していますが、ここでは全体を法華宗としてまとめてとらえます。

法華宗（日蓮宗）の発展

中世の仏教教団や神社は、現在のイメージとはまるで異なった組織集団でした。大寺院は本堂のほかにはたくさんの支院である塔頭

（たっちゅう）を率いて巨大な寺社都市を作り、信徒の工房や商店、そこで働く職人や商人を擁していました。多くの寄進・勧進が集まり、利殖や金融もしていたのです。現代の巨大な商社や銀行のような存在であり、大名と同じような軍隊さえも持つ、都市国家だったのです。

種子島・屋久島に布教した本能寺は、応仁の乱の後、京都の町場を復活させた町衆を信徒とし、大いに発展しつつあった法華宗の大本山でした。

ある地域で布教が成功すると、新たな寺が建立されます。そのために多大な寄付金が集められ、建設のために大工、石工、左官、鍛冶、運送、材木ほか資材、食料、慰安など、さまざまな仕事が必要になり、また橋や港湾などが整備されます。資本は地域に還元されるため、いわば公共事業に近い性格すら持っていました。

瀬戸内海に発展する港湾都市を伝えるように西へと布教線を伸ばしてきた法華宗が、応仁の乱の前後に突然南へ方向を変え、種子島・屋久島に影響下に置いたのです。

このころ琉球が海禁（鎖国）した明の貿易中継センターとして発展し、東南アジア～日本をつなぐ存在に成長していました。南海路の発展と同時に、琉球航路の起点ともなった海の三叉路、赤尾木（西之表）港の発展を見越した先見の明があったといえそうです。

屋久島の開発

応仁の乱の前、種子島家の当主幡時は、熊野修験をとりいれていたようで、はるばる熊野へ毎年のように家臣とともに詣でていたようです。途中定宿として側室をおいていた日向細島は、古い修験の地が法華宗に転換した場所でした。幡時は後に妙な死に方をしますが、この側室の子だという時氏が後継に迎えられ、種子島に法華宗を迎え入れることにな

ります。

種子島出身の日典は、布教半ばで命を落とします。代わりに本能寺から派遣された日良は、時氏の庇護のもと、種子島布教を完成させます。そして屋久島も一部布教をおこなったようです。

屋久島における日良の影は、数多くの古いヤクスギ切り株がある白谷雲水峡に残されています。「屋久島大絵図」で見ると、白谷を見下ろす楠川前岳付近に、「浄光坊山」と書かれています。浄光坊とは、浄光寺を追の住処とした浄光院日良のことと考えられます。次に登場する日増の実績から考えて、日良は白谷雲水峡の開発に関わった可能性があると思えるのです。（未完）

出典

鹿児島県の歴史 山川出版社
周辺から見た中世日本 日本の歴史 14 講談社
蒙古襲来 網野義彦 小学館文庫
鹿児島島の湊と薩南諸島 吉川弘文館
日宋貿易と「硫黄の道」 日本史リブレット 75 山川出版社
鎖国と藩貿易 上原兼善 八重岳書房
琉球王国の歴史 月刊沖繩社
琉球戦争一六〇九島津氏の琉球侵攻 上里隆史 ポーダーインク
儒僧の泊如竹日章 松井日俊 1997 桂林学叢 16号 pp167-209
「鉄砲伝来前後」 種子島開発総合センター編 有斐閣
上屋久町郷土誌
屋久町郷土誌 第4巻
屋久島歴史小年表 山本秀雄編
種子島家譜
しまぬゆ
天文法華一揆 今谷明 洋泉社 MC新書
戦国仏教 湯浅治久 中公文庫
「熊野修験」宮家準 吉川弘文館
Wikipedia
中世日向国関係年表
<http://www.nagai-bunko.com/shuushi/en/hyuuga/itonenpyou.htm>

Calendar・2010-11

2010

- 6/20 きのくに国際高等専修学校修学旅行受け入れ
 7/5 松本 パナソニック取材で薄型テレビゲット
 7/6-8 屋久島高校職場体験で男子4名受け入れ
 7/11 松本 ダイビングクラブ タンク下・ゼロ戦
 7/14 市川 知床世界遺産登録5周年シンポジウムでパネリスト
 網走へ ついでに旭山動物園見学
 7/17-22 池田裕二君短期研修
 8/27-30 岡山理科大学附属中学研修旅行受け入れ
 9/1-6 岡山理科大学エコツーリズム技法実習受け入れ
 9/26 淀川橋補修用の資材を搬入していたヘリコプターが紀元命
 水の源流にて墜落し乗員2名死亡。紀元命水飲用禁止へ。
 10/3 松本 ダイビングクラブ 大浦・タマガリ
 10/6 研修生大森繁君岡山へ帰還
 10/6-9 加藤ヨガ屋久島ワークショップ
 10/7 松本 東京環境工科専門学院スノーケリング実習①
 10/10 市川・比留間 MBC 取材/世界遺産センター映像資料
 10/14-16 鳥取東高校研修旅行受け入れ
 10/15 松本 東京環境工科専門学院スノーケリング実習②
 10/16 北山 オズの魔法使い(ミュージカル)に参加
 11/5 小原 JICA 研修講師
 11/7-8 小原 ODSS 屋久島研修講師
 11/8-9 松本 ダイビングクラブ 口永良部島
 11/12-14 市川 JRCA シーシニア講習検定会参加 資格取得
 11/17-18 小原 瀬戸内町エコツーリズム研修 講師
 11/17 市川 産経新聞・サイクリング屋久島の取材
 11/30-12/2 松本 屋久島観光協会のキャンペーンで鳥取へ
 12/5 松本 ダイビングクラブ 栗生
 12/10-13 小原・櫻村 瀬戸内町エコツーリズム実習で奄美大島へ
 12/12 松本 ダイビングクラブ 湯泊
 12/24-27 小原 岡山理科大学教員免許更新講習講師
 2011
 1/18-20 比留間 屋久島ガイドセミナー参加
 1/21-23 松本・小原 エコツーリズム技法講義で岡山理科大学へ
 2/1-3 比留間 日赤救命救急講習受講
 2/14-18 松本 東京でモニタリング 1000 サンゴ調査報告会
 ついでに営業活動
 2/20 比留間 第1回サイクリング屋久島大会に参加
 松本 ボランティアスタッフとして大会をサポート
 3/4 市川 屋久島高校環境コースの実習で西部講師
 3/8-9 市川 水俣愛林館スタッフ研修でランド・西部へ
 3/11 東日本大震災勃発
 3/11-17 松本、小原、櫻村、比留間 「てくてく」取材
 3/22-23 小原 瀬戸内町エコツーリズム実習で奄美大島へ
 3/25-31 市川 ボルネオ・ブルネイツアー講師、櫻村・池田参加
 3/29-4/4 松本 岡山理科大学ダイビングライセンス講習、
 比留間も参加し、ライセンス取得
 4/6 池田裕二 研修開始
 4/8 松本 JES 震災復興支援会議(東京)に参加

Contents

巻頭言「旅の子カラ」	市川 聡	1
東日本大震災復興支援ボランティア報告	松本 毅	2
歌の力が届く範囲	比留間雄太	6
『屋久島自然クラブ』再始動	北山裕子	7
2010年度YNACスタッフのこの一枚	スタッフ一同	8
もしツアーガイドがドラッカーのマネジメントを読んだら	櫻村精一	10
剽窃 情熱と観察眼	櫻村精一	11
屋久島修行開始	池田裕二	12
屋久杉伐採の始まり	小原比呂志	14

- 4/10 韓国テレビ取材、原発事故の影響でキャンセル
 4/17 屋久島自然クラブ vol.1『西部照葉樹林フォレストウォーク』
 4/18-23 松本 岩手県久慈市野田村にて復興ボランティアに参加
 4/25 YNAC 新料金スタート!より利用しやすくなりました
 4/25 松本 環境省エコツーリズム支援会議に出席(霞ヶ関)
 4/28 YNAC ホームページのリニューアル
 5/13-15 小原 鹿児島大学共通教育「エコツアー入門」実習講師
 5/15 屋久島自然クラブ『ロープワーク講座』
 5/18 屋久島自然クラブ アドバンス①『沢登り』
 5/21 松本 ダイビングクラブ 香附子・志戸子
 5/22 屋久島自然クラブ vol.2『蛇之口滝ハイキング』
 5/25 市川 岐阜県立森林文化アカデミーにてインタープリテーショ
 ンの講義
 5/26-29 JICA エコツーリズム研修(ベネズエラ、ドミニカ、トンガ、
 インドネシア、バングラディシュから参加)の講師

取材記事

- ・パナソニック社内報「pana89」(松本)
 屋久島の森・海・川で自然観を呼び覚ます
- ・「ブルーガイドてくてく歩き ネイチャーガイドと歩く屋久島」
 海の案内人松本毅さんと行く 屋久島の海遊び他

編集後記

☆現地に行ってみるとテレビで見るとは大違い。実物の迫力を感じました。(た)☆心の支えは、和柄ファッションとカールツァイスのレンズ。欲しいものはニコンの D7000。(せ)☆引っ越しを考えていますが、屋久島で家を見つけるのはムズカシイ!(ひき)☆どうも野鳥が好きみたいです。歌う。という共通点が心を近づけるのでしょうか。片思いでしょうけど。(ゆひ)☆島に来る前に前歯が欠けました。Ca 不足ですが頑張ります。(ゆい)☆東日本大震災、心よりお見舞い申し上げます。皆様の心に何か届けば嬉しいです。(さ)

YNAC 通信(ワイナックつうしん) NO.28

発行日:2011年6月10日

発行所:奄屋久島野外活動総合センター

住所:〒891-4205 鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦 368-21

TEL 0997-42-0944 FAX 0997-42-0945

E-mail: forest@ynac.com URL: http://www.ynac.com/